



Title	日本語と中国語における分配量化と全称量化の生成文法による分析 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	張, 瑩
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16488号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94859
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Ying_Zhang_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名： 張 瑩

主査 教 授 藤田 健
審査委員 副査 教 授 佐藤 知己
副査 教 授 応 雄

学位論文題名

日本語と中国語における分配量化と全称量化の生成文法による分析

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文は、日本語と中国語における分配量化と全称量化に関わる広範囲な言語現象について、体系的な考察と分析を行ったものである。従来、量化詞の解釈に関する研究については、特に生成文法の領域において英語の現象に関する分析が積極的に展開され、本論文でも扱っている **all** や **each** をはじめとする量化詞について妥当性の高い仮説が提示されており、他言語の同種の現象を分析する上で土台をなすものと言える。一方で、日本語と中国語の量化詞については、比較的多くの先行研究があるものの、当該現象について一貫性のある説得的な分析はいまだに提示されているとは言い難い状況にある。特に、本論文が扱う中国語の“都”、“全”、“各”については、極めて複雑なふるまいを示すことから、理論的な整合性に基づいて体系的な説明を行った研究は存在しないと言える。また、日本語の「それぞれ」についても言語事実を詳細に観察した上での十分な分析がなされているとは言い難く、「～ずつ」、「X とも」、「全 X」にいたっては、その量化に関する特性を理論的観点から分析した研究は皆無である。

まず当該現象の分析の基盤となる分配量化詞の定義について、英語の **each** を名詞後置の **each** と副詞位置の **each** と再定義し、両者の意味機能の違いを明確にする新たな視点を導入した上で、この仮説を中国語と日本語に適用し、対照言語学的に極めて重要な示唆に富む分析を提示している。日本語の「それぞれ」は英語の副詞位置の **each** に相当し、分配量化子として働く要素であるのに対し、「～ずつ」は英語の名詞後置の **each** に相当し、「それぞれ」の変項を明確にする役割を果たすとする。「X とも」については、全称量化子として機能し、本論文で提案する **ALL-EVERY** 構造を構成すると主張する。「全 X」については、副詞的用法と名詞的用法の二つのタイプに区別し、その機能を理論的観点から明確に区別している。以上の分析は、日本語研究における大きな貢献と言える。

中国語の“都”については、全称量化子であり、“都”の姉妹位置には“每（一）～”が存在

し、両者で ALL-EVERY 構造をなすと仮定すると同時に、例外が言及された“都”構文を選択関数という意味論的概念を導入することによって見事に説明している。“全”についても全称量化子であるとし、先行詞が量化される単位を不明確な集団名詞と解釈するため、“都”とは異なり EVERY という変項を伴わないと分析する。“各”については、分配量化詞であるとし、副詞位置の“各”と名詞前置の“各”に分類することでその特性を説明する。このように、三つの量化詞の特性を理論言語学的に提示した意義は大きい。

日本語と中国語の量化表現の対応関係については、副詞的“各”は「それぞれ」、名詞後置の“各”は「～ずつ」、「都」は「X とも」、「全」は名詞的「全 X」に類似しているとし、それぞれの共通点と相違点を理論的に明快に説明している。両言語の分配量化と全称量化に関わる要素の特徴づけを形態統語論的な観点から明確に提示するとともに、対照言語学的観点から該当する要素の対応関係を明示することにも成功している。このような両言語の量化詞に関する包括的対照研究は類を見ない。

さらに“都”と“全”、副詞位置の“各”と名詞前置の“各”、“都”と“各”、「それぞれ」と「～ずつ」、「X とも」と「それぞれ（～ずつ）」など、従来分析されていない複数の量化詞が共起する現象についても、一次分配量化と二重分配量化を区別することで、その意味解釈に関するメカニズムを明快に説明する。量化詞の意味解釈を明示的に説明することを可能にする分配名詞句(D-NP)と範囲名詞句(R-NP)という概念を有効に活用し、機能範疇や空範疇、移動操作などの生成文法における理論的装置を駆使することで、従来未解決であった問題に対する考察を論理的に展開している。

以上の点から、本論文は理論言語学、個別言語研究としての日本語学・中国語学、さらには複数の言語を比較対照する対照言語学のいずれの観点からも大きな貢献をなしていると評価される。言語の普遍性と個別性を理解する上で、分配量化表現の研究は重要な役割を果たすと言え、さまざまな方向での発展性を備えた研究であると言える。

・学位授与に関する委員会の所見

多くの新たな知見が提示された優れた論文ではあるが、審査委員会においていくつかの問題点が指摘された。量化詞の作用域を示す意味表示について正確さを欠く部分があるのではないかという点や、日本語と中国語の例文の文法性の判断に疑問が残るという問題などがあげられる。しかし、これらの点は本論文の重要性をまったく損なうものではなく、今後の更なる研究の展開によって十分克服できるものと判断される。

以上の評価を踏まえ、審査委員会として全員一致して、張瑩氏に博士（文学）の学位を授与するのが妥当であるとの結論に達した。